

東日本大震災から10年が経過し、12年目に入った。今の中学生には、その当時の記憶はないだろう。彼らにとっての震災は、後になって人から聞いた話や映像で見たもので構成されているはずである。我々教員とは、かなりの温度差がある。

こちらが、いくら一生懸命語ったとしても、実感を伴って理解してもらえるかはわからない。たぶん難しいであろう。このままでは、どんどん風化の一途を辿るだけである。

では、どうすればいいのか。本校では放射線教育を行っている。昨年度は、1年生が専門的な立場からの話を聞いた。専門的なゆえに難しい内容もあったが、みんな真剣に聞いていた。これからも続けた方がよい。

この4月から都会へと旅立っていった長男が言っていた。気仙沼の伝承館には行った方がよいと。東北を離れるにあたって友人と行ってきたのだそうだ。震災当時、彼は中学1年生だった。記憶もはっきりあるだろう。その後の状況も中学生なりに理解できていたことであろう。若者は意外としっかりとした考えをもっている。震災の経験が、自分の進路や職業の選択に影響を及ぼしている若者も多い。

そんなに難しいことではない。震災に遭った地域にある「伝承館」に生徒を連れて行けばよい。どの伝承館もよくできている。工夫されている。どの生徒も何かを感じるはずである。実体験はできないが、間接的だとしても自分なりに考えるはずである。我々が多くを語る必要はない。生徒は必ずや心にとどめるはずである。

これは、第2次世界大戦、太平洋戦争、原子力爆弾にも当てはまる。日本は唯一の被爆国である。広島に行って「広島平和記念資料館」いわゆる原爆資料館に行くのがよい。これも我々は多くを語る必要はない。何も言わずとも、生徒は戦争というものを考えるはずである。そして、何をすべきかを考えるはずである。

我々がやるべきことは、伝承館や原爆資料館に連れていくためのコーディネートである。できれば、生徒として一度行き、もう少し大人になってから、もう一度ゆっくり行くのがいいように思う。感じ方や考え方が変わる。

伝承とは、受け継いで後世に伝えることである。若者世代に受け継ぐのが我々の使命である。それを強力に推し進めてくれるのが伝承館である。今年度の中学1年生は、震災の頃に生まれたことになる。そう考えると、何としてでも伝承しなければという思いが強くなってくる。

そのうち、長男に勧められた「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」にも行ってみようと思う。息子曰く、遺構は見ておくべきだそうで、早く行かないと壊れてしまうかもしれないということであった。急がねば。